

たきびの詩人巽聖歌の日記から

巽聖歌の資料の中に5冊の日記が残されています。これら二十歳代の日記には、作品からは見えてこない日々の暮らしや葛藤・苦悩が記されていて、その人物像をより深く理解することが出来、興味深いです。

大正十三・十四年の日記は、十九〜二十歳にかけて、最初に上京し、時事新報社の『少年』『少女』の編集部勤務していた時の日記です。創作ノートとしても利用されていて、『赤い鳥』で活躍していく時代の瑞々しい作品が記されています。未発表のものや、投稿しても採用されなかった作品もあり、刊行物では見ることのできない作品や、推敲の跡を見ることが出来ます。代表作「水口」の原稿もありました。(大正十二年日記は、原本は失われ、『日本児童文学』に翻刻されている抄録のみ)。

昭和四年の日記は、二度目の上京をした時のものです。文学者として独り立ちも出来ず、昭和の大恐慌下の東京での就職もままならず、日々の暮らしに悪戦苦闘しながら、文学の道をわが道としていくという決心だけは揺るがない、心打たれる内容です。やっと、北原白秋の後押しで、「アルプス」という出版社に就職が決まるところまでが記されています。

昭和八年・九年の日記は、「アルプス」の職場日記で、経理や庶務を担当していた聖歌の奮闘がわかります。生活は安定し家族も出来ませんが、経営難の中、様々なトラブルにみまわれ「カミ、カミ、カミ、かみ、紙で相変わらさずの日を送る」昭和八年二月二十三日)という、ため息も聞こえてきます。

『北原白秋全集』を刊行している記述も散見します。

昭和九年二月十六日は、「第一回宮沢賢治友の会」が新宿で開催され、草野心平・高村幸太郎・新美南吉らとともに聖歌が写っている記念写真が残っています。この日の日記に、友の会の記述はありませんが、税務調査があつて、税務署の調査員にいろいろ叱られたことが書かれていて、こんな仕事のあとに、会場へ駆けつけていったことが想像されます。